

2020 ICT利活用ワーキング

対面对話推奨の活動を いかにしてオンラインへ 移行させたのか

～ICT利活用ワーキングの活動からの考察～



どうすれば非対面のコミュニケーションが成立するのか？

コロナ禍にあり皆様大変なご苦勞をされているかと思いますが、年度当初を思い出せば、2020年度は我々アプリックにとっても波乱の年でありました。すでに昨年度末には過去経験したことのないような状況になるとの想定もありましたが、ほどなく緊急事態宣言の発令とともに、「密集、密接、密閉（三密）」回避が

大原則の社会が訪れました。

この環境変化は、日頃より情報通信に携わっている我々でさえ戸惑うことも多かった様に思い返します。具体的に言えば、活動拠点がテレワーク（自宅）に移り、メールでやり取りをしたり、会議ツールでミーティングをしたりするということはある程度の「慣れ」により問題なく代

替手段に移行できました。ただその一方で、会員相互で意見を交わすようなことを想定すると、「どのような方法があるのだろうか？」と一度立ち止まって様々な方法を試しながら評価をしていかなくてはならないというジレンマも。今年度の活動はそういった中でスタートしたのです。

会議システムのみでコミュニケーションは十分…はウソ

コミュニケーションには様々な形がありますが、アプリックのワーキングにおいて

は、ここ数年来、相互のコミュニケーションを重視した活動をしております。参加者に

は、^{なんどき}何時もまず個人作業として「付箋紙」に個人の意見や考えを書いていただき、その



アプリック会議室に参集し検討するビフォーコロナの検討スタイル

後に参加者全体に付箋紙を見せながら発表をいただくことで参加者同士のコミュニケーションを加速する方法を取っています。

この方法ですと、よくあるケースですが司会者やリーダー「何かご意見ありませんか？」の問いかけに重い沈黙が続く…ということではなく「対話」が活性化します。ところが、ウェブカメラ越しにリアルな付箋紙を映したところで「見えない」「証跡が残らない」などの問題があり「臨場感」が高まりません。講演方式で主に一方向の情報伝達を行う場合、オンライン会議システムはとても有効であると思いますが、本ワーキング



付箋に青ペンで考えを書き込み整理していた

における双方向の対話に於いては完全な失敗でした。

テレビ会議システムは随分前から存在していますが、その活用方法が限定的であったのは、おそらく対面での直接対話が根強く好まれ、このよ

うな具体的な活用シーンの問題を残したまま黙認してきたからではないかと感じています。そうした意味でもICT利活用の観点からまだまだやるべきことはあると思います。

テレワークで発生するよくある問題

前述のようなことを踏まえながら、様々な情報共有ツールを試し、最終的に「日本語化されており、会員の皆様が使える一般的なツール」という評価基準から、グーグルドライブに行き着きました。

しかし、ここでも問題がありました。会員の皆様も会社貸与のパソコンを携えテレワークに移行されましたが、

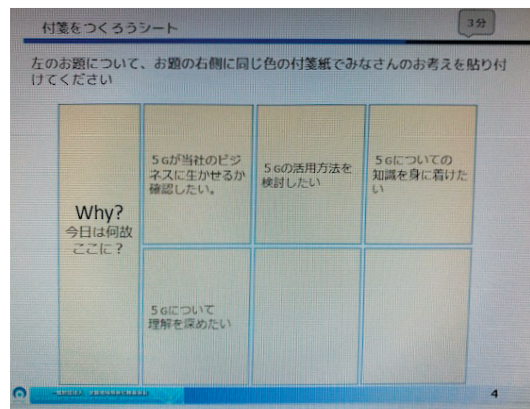
会社の方針で新しいアプリやソフトはインストールすることを許可しないケースがあったのです。許可なくインストールするとペナルティが課せられる重要な問題です。解決策としては、オンライン会議システムのチャットから付箋紙に記入したい内容を送信し、事務局がグーグルドライブに代行入力するという方法

がありますが、入力が増加すると事務局では対応しきれず、会議の進行を遅らせることになるので注意が必要です。

同じ組織内で情報流通する時代からオープンイノベーションの時代へ移りゆく中で、共通基盤として使用できるツールが見つからないという問題も起こっているのです。



ビフォーコロナの検討会にて壁一面に貼り出された会員のアイデア。
フィジカルディスタンスを求められ活動が再開できなくなった



オンライン上に付箋を再現したアフターコロナ型検討会ツール。会員からも違和感なく参加できると好評

活動のカギは昨年からの流れを止めないこと

様々な問題に直面しながらも、アプリックは基本的な環境を整え、会員の皆様を交えた「Read For Action」を2020年5月より本格稼働。同年7月までに全11回（インフラプラットフォームワーキングとの共同開催分含む）開催し、多くの皆様にご参加いただきました。

従来のオフライン開催からご参加いただいている方からは、「違和感を感じることなく参加できた」との感想をいただき、また、この活動に関心を持たれて新たに参加された方も多数おられました。特に自治体職員の参加が目立ち、オンライン開催のメリットを改めて感じました。主催者と

しましては、皆様の熱意にお応えするためにオンライン環境をしっかりと整備し、全11回、ほぼ毎週開催できたことに感謝無量です。「継続は力なり」の精神で、さらに充実した環境を構築し、今後も「Read For Action」を続けていきたいと考えています。

やっとの思いでライブイベント開催に漕ぎつけた

アプリックのワーキングでは、これまで年1回のICT活用サミット及び年数回のセミナーを開催してまいりまし

た。これは、アプリックの活動を広く知っていただくとともに、有識者の方々に直接質問ができる貴重な機会として

重要視しているライブイベントです。

ところが、コロナ禍によって、一時期開催が危ぶまれま

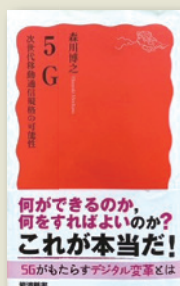
した。従前よりオフラインでのライブイベントには慣れ親しんでおり、諸先輩方より準備や運営方法についてノウハウの継承がされておりますが、オンラインでの経験はゼロか

らのスタートといっても過言ではない状態だったからです。様々なツールを試した上で、日本マイクロソフト社のご協力をいただきながらなんとかオンライン開催をできる状況

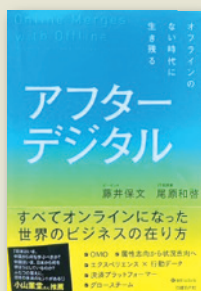
まで辿り着いたのが、2020年5月でした。

●「Read For Action」で扱った書籍

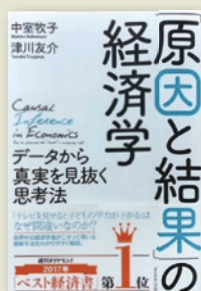
インフラWGと共催で、WG主査森川博之先生の著書を読破



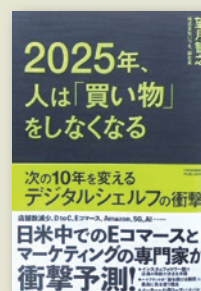
「5G」と合わせて読むことでデータ活用、AI活用についても考察



世界のデジタル活用最前線事例の情報収集



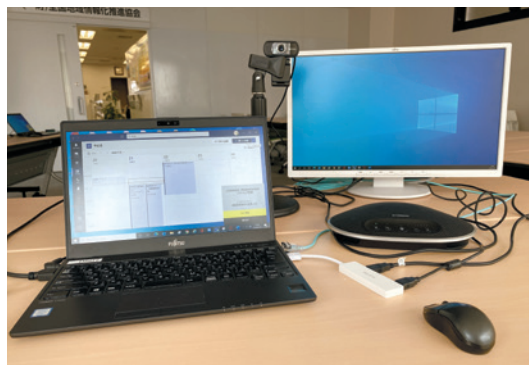
EBPMを理解するために必要な因果関係を学習



デジタル社会における消費生活の変化に関する情報収集

ライブはもはやコミュニケーションの「万能薬」ではない

当初は、様々なライブイベント開催のお知らせが毎日メールで送られ始めた時期でしたので、それらを拝見し、進行方法などを参考にしながらシナリオを作るという手探りの状態でした。(昨年の)緊急事態宣言から半年間の様子を観察しますと、どの企業・団体も概ねライブイベント開催に関するスキルレベルが格段に向上しており、それだけノウハウが蓄積されてきた証しと言えるでしょう。ただ、ライブイベント自体が一般的なものになりましたので、集客が難しくなっているようで、最近では、フェイスブックの告知広告を見る限り、



アフターコロナのライブイベントをコントロールする統制席

テレビ等でお馴染みの方が登壇するといったケースばかりが目立ちます。

また、来年度のセミナー開催にあたっての課題も見つかりました。オンラインの場合は、聴講者の表情や反応（拍手、相槌など）がご登壇者からはわからない点です。これについては、今年度のご登壇

者からのご指摘をいただきました。すでにタイムライン形式のQ&Aシステム併用で会議運用するケースもあり、可能な範囲でリアルとオンライン両方の環境を準備する等、対策の必要性を痛感しております。

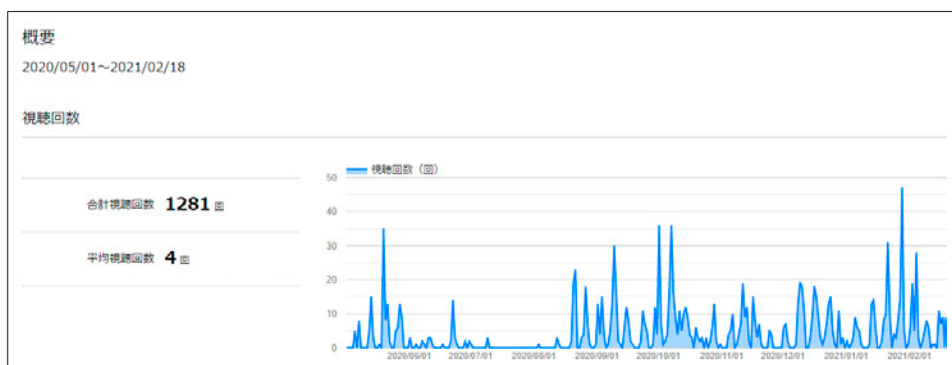
年間170回余りのメルマガ配信、その結果は？

オンラインへの移行により、対面する機会がほとんどなくなり、「会員相互のコミュニケーションの機会をどのように設けるか」という悩ましい問題も発生しました。そこでICT利活用ワーキングは、事務局から各種情報を年170回以上にわたりメールマガジン

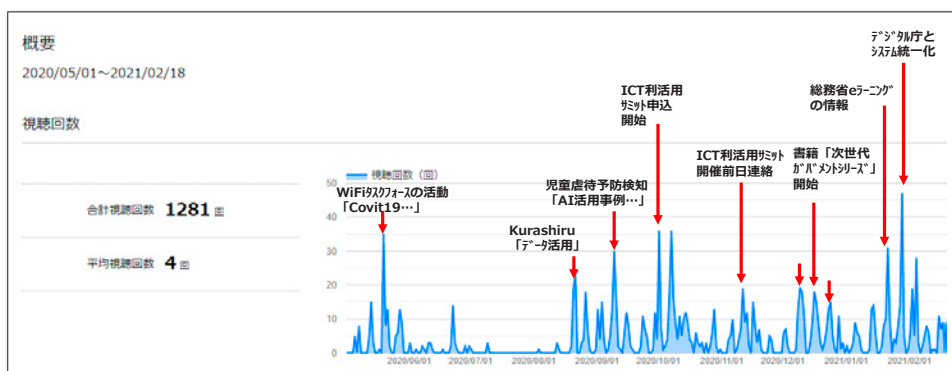
で発信し、会員の皆様と情報を共有。さらに必要に応じてテーマごとの「オンライン対話会」を開催する等、活動内容を変更しました。メールマガジンの配信内容と視聴数データを突合してみると、会員が「どのようなキーワードに関心があるのか」「どのく

らいの長さのコンテンツだと見ていただけるのか」等の傾向が分かるというメリットもあります。

また、セミナー等の開催により、「どの程度の方がアプリックを新たに認知いただけたのか」等、その効果も明らかにしてまいりました。



映像配信システムから入手した映像視聴に関するデータのみだと意味合いがわからない



メール配信システム&映像配信システム、それぞれから入手したデータを合わせて分析すると意味合いがよくわかる

来年度に向けて

ICT利活用ワーキングの活動を更に発展させるために、会員の皆様の声と関心を中心に活動を見直す必要があることを痛感しました。“地域の「小さな課題」を産官学が有する知恵を活用して解決するモデルを創造すること”。ICT利活用ワーキングが目指す活動への引き続きのご支援とご参画を宜しくお願いいたします。

アプリックICT利活用ワーキングの活動、取り組みに関する詳細はこちらから



アプリックインフラプラットフォームワーキングの活動、取り組みに関する詳細はこちらから

